



# てらうる



2018年  
**11**月  
No.851

■発行所 ■  
日本福音ルーテル教会事務局広報室  
〒162-0842 東京都新宿区市谷砂土原町 1-1  
電話 03-3260-8631

■ウェブサイト ■ <http://www.jelc.or.jp>  
■E-mail ■ [jelc@jelc.or.jp](mailto:jelc@jelc.or.jp)

■発行人 ■ 安井宣生 koho006@jelc.or.jp  
■印刷人 ■ 精文堂印刷株式会社  
■定価 ■ 1部 40円 (郵税を含む)  
■振替口座 ■ 00190-7-1734

## 説教「イエス様が共にある十字架を背負って」

日本福音ルーテル岡山教会、松江教会、高松教会、福山教会

牧師 加納寛之

「わたしの後に従いたい者は、自分を捨て、自分の十字架を背負って、わたしに従いなさい。」  
(マルコによる福音書8章34節)



車の運転を始めた頃、父に「牽引ロープとバッテリーケーブルを常に携行するよう」と言われました。助けてもらっただけでなく、助ける側になることもあるから、心構えと準備をとの親心だったのでしょうか。実際、北海道の冬場、雪に埋まった車の救助を何度もし、自分も助けられました。父の言葉に従って良かったと思いい、準備の大切さを実感したものです。

7月の豪雨の後、岡山県内の倉敷真備地区に災害支援ボランティアとして何度か参加しました。河川の氾濫で4500戸以上が浸水し、5メートル(2階の窓付近)まで水が来た地区です。岡山のキリスト教会の群れや聖公会のチームに加えていただき、日本各地また海外からのメンバーとも共に働きをしました。炎天下、重たい泥を家から引き出したり、大きな荷物を

実体験する時でした。また一ヶ月ほど経ってからは作業だけでなく、その時のお話を聴くことが寄り添う大切な時にもなりました。働く者一人一人が言葉でなく、その姿を通してキリストを証しする生き方がありました。隣人として立たせていただく時でありながら、重たいものを背負う、大変な作業が続く中で頭の中に「自分の十字架を背負って、わたしに従いなさい」と何度も浮かんできました。

十字架とひと言葉で言うても意味や表現のされ方は様々です。感謝すべきことに礼拝堂の十字架が特徴的な教会で働きを担い、思い出深いものがいくつもあります。釧路教会は真っ黒い十字架で、人の罪を象徴する十字架。帯広教会は重厚な木で掘られた手が見える十字架で、それは罪の赦しを与えるイエス様の愛を示す十字架。広島教会の十字架は柔らかな曲線の十字架で、キリストの愛と恵

みを無言のうちに表現する十字架。そして、岡山教会の十字架は陽の入る時間によって影が変わる十字架で、常に変わる弱さを持つ人を思わせ、その変わる心ゆえにイエス様の十字架が必要と教える十字架。十字架そのものが多様な意味を持つものだから、イエス様が言われる「自分の十字架」にもいくつもの意味があるのです。

「自分の十字架」はもう一歩踏み込みます。十字架は元来、罪人の処刑に用いられるものですから、罪の象徴、弱さの象徴、重さや困難さと言えます。わたしが今抱えているもの、現実そのもの、時として過去や未来が一つの自分の十字架です。しかし、私たちが背負うのは決してただ重たいだけのもの、背負うことを拒否したくなる十字架ではありません。なぜならば「空の十字架」ではないからです。キリスト者は常に「イエス様が共にある十字架」を背負って歩んでい

ます。イエス様が共にある十字架は「愛の十字架」に他なりません。イエス様がなさった働きに倣う、倣おうと志す私たちは愛の十字架、キリストその方を背負うよう呼びかけられています。使命はそこに喜びがなければ背負うことはできません。ボランティアとしての働きは楽なものではありませんでした。それでもキリストの愛を届ける働き、使命、イエス様が共にあると信じ、仕え合う中にある喜び、互いに愛しあう中に感謝があつたから愛の十字架を背負えたのだと振り返っています。

大きな災害を目の当たりにし、準備をしていますが、それを用いることができない事態があることも教えられました。けれども、心だけはいつも準備しておくことができます。その時にどうするかを考えることではなく、何があつても主は共におられると心に留めることが心の準備です。

イエス様が共にある十字架、愛の十字架を背負うこととは、助ける・愛を届ける・準備と共に、助けられる・愛を受け取る準備です。互いに愛しあうことを教えてくださった方に従う喜びの道を、イエス様が共にある十字架を背負って歩んでまいります。



搬出したり、思い出の品を綺麗にしたり。水に浸かっていたものも臭いのは臭いでもありません。戦いでもありません。時には何週間も溜まっていた水を被ったこともありました。まさに泥と塵を被ることが奉仕であると

十字架とひと言葉で言うても意味や表現のされ方は様々です。感謝すべきことに礼拝堂の十字架が特徴的な教会で働きを担い、思い出深いものがいくつもあります。釧路教会は真っ黒い十字架で、人の罪を象徴する十字架。帯広教会は重厚な木で掘られた手が見える十字架で、それは罪の赦しを与えるイエス様の愛を示す十字架。広島教会の十字架は柔らかな曲線の十字架で、キリストの愛と恵

みを無言のうちに表現する十字架。そして、岡山教会の十字架は陽の入る時間によって影が変わる十字架で、常に変わる弱さを持つ人を思わせ、その変わる心ゆえにイエス様の十字架が必要と教える十字架。十字架そのものが多様な意味を持つものだから、イエス様が言われる「自分の十字架」にもいくつもの意味があるのです。

「自分の十字架」はもう一歩踏み込みます。十字架は元来、罪人の処刑に用いられるものですから、罪の象徴、弱さの象徴、重さや困難さと言えます。わたしが今抱えているもの、現実そのもの、時として過去や未来が一つの自分の十字架です。しかし、私たちが背負うのは決してただ重たいだけのもの、背負うことを拒否したくなる十字架ではありません。なぜならば「空の十字架」ではないからです。キリスト者は常に「イエス様が共にある十字架」を背負って歩んでい

ます。イエス様が共にある十字架は「愛の十字架」に他なりません。イエス様がなさった働きに倣う、倣おうと志す私たちは愛の十字架、キリストその方を背負うよう呼びかけられています。使命はそこに喜びがなければ背負うことはできません。ボランティアとしての働きは楽なものではありませんでした。それでもキリストの愛を届ける働き、使命、イエス様が共にあると信じ、仕え合う中にある喜び、互いに愛しあう中に感謝があつたから愛の十字架を背負えたのだと振り返っています。

大きな災害を目の当たりにし、準備をしていますが、それを用いることができない事態があることも教えられました。けれども、心だけはいつも準備しておくことができます。その時にどうするかを考えることではなく、何があつても主は共におられると心に留めることが心の準備です。

イエス様が共にある十字架、愛の十字架を背負うこととは、助ける・愛を届ける・準備と共に、助けられる・愛を受け取る準備です。互いに愛しあうことを教えてくださった方に従う喜びの道を、イエス様が共にある十字架を背負って歩んでまいります。

⑧鉄は鉄をもつて研磨する。人はその友によつて研摩される(箴言27章17節)



かつて非常にやんちゃな生徒がいました。授業をサボろうとするのを見つけ、猛ダッシュして捕獲したこともありました。怒りを抑えられず暴れ回るのを必死に制したこともありました。大人の都合を嫌いだ、真理を求めが故に大暴れしていた彼は、まるで研ぎすまされた刃のようでした。正面から向き合うことは正に真剣白刃取り。叫ぶように祈りながら闘い、またわたし自身が教師として試される日々でした。

をに来たとのこと。「先生、礼拝のお話して卒業しても助けるから必ず相談しろって言ったじゃあ。だから来たよ。俺、助けて欲しいって言える人がいることが、こんなに幸せなことなんだって、今わかったよ。」

**JELA インド・ワークキャンプ 参加者募集**

◆期間:2019年2月9日(土)~19日(火)11日間  
◆派遣先:インド、マハラシュトラ州ジャムネド村にある医療福祉施設 CRHP(総合的地域健康プロジェクト)  
◆内容:義足作り/児童とのふれあい/毎日の学びの分かち合い  
◆参加費用:18万円  
※「友達割引」複数で申し込んだ場合、1人につき5千円を割引いたします。パスポート、海外旅行保険費用、派遣決定者説明会と出発・帰国時の集合場所から居住地までの交通費や、前泊・後泊する場合の宿泊費用については、上記の参加費とは別に個人負担となります。  
◆問い合わせ:申込用紙請求先:JELA インド・ワークキャンプ係  
〒150-0013 東京都渋谷区恵比寿 1-20-26  
電話:03-3447-1521 FAX:03-3447-1523  
◆申込書類(下記からダウンロードできます)  
<http://jelanews.blogspot.com/2018/09/2019.html>  
◆申込期限:2018年11月26日(必着)





議長室から 大柴 謙治

### 教会は天国に一番近いところ

行っていますので、年に4回召天者を覚えて礼拝をしていることになりませう。宣教102年目を踏み出している大阪教会には100人を超える召天者のお写真が納められていて、年に2回はそれを前に並べて共に礼拝に与ります。毎週私たちは主日礼拝で聖餐式を行っています。キリストの食卓を中心に目に見えるこちら側には私たちが生ける者たちが集い、見えない向こう側は天に召された聖徒の群れが

集っていると理解しています。キリストは「生者と死者の双方の救い主」であり、主の食卓は私たちにとって終わりの日の祝宴の先取り、前祝いでもありません。パウロの言う通り、私たちは生きるとすればある女性信徒の言葉で「た。義人ヨブと同じようにその姉妹は「スモン病」のためそれまでの幸せな家庭生活を突然失ってしまっています。絶望の中で彼女はキリストと出会い、キリストを自らの救い主と信じ

対して告げられた言葉でした。実はそこにはもう一言添えられていました。「だからあなたも洗礼を受けてね。そして教会に行つてね。その言葉の通り、彼女の死後、ご伴侶は忠実に毎週教会に通い洗礼を受けられました。やがてそのご伴侶も病いのため天に召され、今はお二人とも天国で主のもとで安らつておられると信じます。地上の教会は天上の教会とつながっています。パウロは「われらの国籍は天にあり」と言いました。私たちが今ここで地上と天上の二重国籍を同時に生きています。

#### ルター研究所 秋の講演会へのお誘い

ルター研究所（ルーテル学院大学・日本ルーテル神学校／所長 江口再起）では毎年秋に東京都内の各教会を会場に講演会を開催しています。

今回の講演は小田部進一先生（玉川大学教授）による「宗教改革から500年後の人間の自由と不安と希望」です。小田部先生は「昨年『ルターから今を考える』を出版され、現在に至っています。また、1980年第9回全国総会において東教区の分区分であった北海道を「北海道特別教区」として独立させることが承認され、1981年から北海道特別教区として歩み出しています。今後については、北海道特別教区固有の課題ではなく、当教会の課題であることがすでに共通の認識とされています。

⑥第7次総合の方策の指針については、大柴が確認されました。今後、教区

### 宣教会議報告

宣教会長 永吉秀人

9月25日～26日に宣教会議が行われました。執行部と信徒常議員の他、各教区から教区長を含む3名ずつが出席し、「第6次総合の方策の展開」「ポスト宗教改革500年」をテーマに協議しました。

①「ハラスメントの予防と解決のために」組織としてハラスメントにどう対応

するかと題する講義を受けました。講師は与語淑子（よごしこ）さん。当教会としての目的はハラスメントに対応するシステムの構築です。ハラスメントの定義を理解し、事例に学び、ハラスメント事象への対応に留まらず防止体制を目指しての学習を重ねていきます。ハラスメントの学習は、同時にマインオリティへの理解にも通じており、今後は他教会における体制や「二次被害」についての学習を予定しています。

た現状で、改めて1969年にエチオピアのアスマラでのJCM会議（旧日本伝道協議会）において、内海季秋議長による1974年を期して自給するとの発言が日本福音ルーテル教会の公式な自給宣言とされた経緯を確認しました。

が自給路線であったことに対し、第5次としてのパワーミッション（PM）21の方策は伝道と教育の推進でした。現行の第6次総合の方策は、社会経済の長期低迷ゆえに教会財政も縮小を強いられる中、希望を抱いて明日の教会形成を目指すものとされています。

③各教区の建築計画について、まずそれぞれの会堂、牧師館の老朽状況が報告されました。新築計画も紹介される中、教会合同による土地売却金の規定を確認し、活用の可能性について協議しました。また、教職が居住しない会堂、牧師館管理の現状報告を受け、解体資金を教区の借入とする手段が事務局より紹介されました。

⑤北海道伝道の総括と今後について、岡田教区長より詳細な資料が提出されました。1916年に始まる北海道伝道は、1966年からの全国レベル開拓伝道、1977年からの東教区北海道伝道強化推進計画、1981年からの北海道伝道推進計画、1996年からの北海道伝道長期計画

と2002年からのPM21による教会合同体制を経て、現在に至っています。また、1980年第9回全国総会において東教区の分区分であった北海道を「北海道特別教区」として独立させることが承認され、1981年から北海道特別教区として歩み出しています。今後については、北海道特別教区固有の課題ではなく、当教会の課題であることがすでに共通の認識とされています。

⑦TNG活動は、幼児・こども・ティーンズ・ユースの4部門。ティーンズは宣教100年以來、他部門はPM21で推進され、現在に至ります。これらは当教会の使命と責任において、各部門に委託された活動であることを確認し、議場は拍手をもって活動と担当者への感謝を表明しました。





すようお祈りいたします。

●連帯献金について

西教区による豪雨被災の方々への支援活動、北海道での被災された方々への支援活動への支援を頂き、感謝いたします。それに加えて、アメリカ福音ルーテル教会を通してインドネシアのバタックキリスト教会（ルーテル世界連盟加盟教会）の支援活動への支援を目的とし、「2018災害支援」連帯献金へのご協力をお願いしております。（献金総額約700万円）

●西教区からの報告

（西教区書記 水原 郎）

9月の基本的な作業日は14日、21日、28日でした。このうち14日と21日は雨

すでに寄せ頂いた献金から、現地教会や現地教

区の見聞を聞き、第一次の支援として西教区による支援活動とは別に下記の送金を行いました。

により中止となりました。これらの日々にも複数名からボランティアの申し込みに頂いていましたが、「二次災害（土砂崩れ）」を懸念しての休止措置とさせて頂きました。

9月6日は池の土砂上げと床下泥上げ、19日、27日、28日も床下泥上げでした。

し、國吉さんには丁寧に猫さんと覚えて祈って頂きました。

10月いっぱいまで、呉市安浦町の「安浦ボランティアセンター」では、同町内の「被害甚大地区」へのボランティア派遣を念頭に置いております。それを受けて私たちが9月中は「被害甚大地区」での作業に協働して作業させて頂きました。「被害甚大地区」は安浦町内の山間部です。様々なご家庭がありましたが、概して高齢の方々が一人で復旧作業をなしておられました。

町の子ども発達支援センター「たんぽぽ」に來所することもたちと一緒にご機を会を与えられました。札幌での超教派のネットワークにより、この支援を継続していく予定であるとのこと

久留米教会 献堂100年の喜び

宮川 幸祐

拝堂は、そんなウォーリス建築の中でも初期の作品の一つに数えられ、九州に現存する中では最古のもので

祈りを合わせてきました。この献堂100周年は、そのようにして神と民が共に歩んできた歴史のしるしとして与えられた出来事です。そして、その歴史は、未来に向かって続いています。これからの、この場を通して多くの人々に

11月11日には記念礼拝もあります。12月にはコンサート、またその後も様々な記念行事を行うてゆければと考えています。皆様から与えられた献堂100年

といてこの喜びの時を用いて、教会の働きが益々盛んに行われてゆくよう、祈り求めています。

11月以降は、当初支援のTさん（広島礼拝所）からのニーズに添える作業を予定しております。今ところ、「電設工事」（蛍光灯の配線）、「土壁の補修」といった作業が必要ということを押握しております。

●祈り合う交わり 9月28日に行われた九州教区女性会長会&熊本地区秋の集いにおいて、地震と停電でご苦労されている北海道の方々を覚えて祈りが届けられました。そして祈りを届ける寄せ書きが道内の各教会へ届けられました。共に主に連なり、祈り、支え合う仲間があることに感謝しますと、帯広教会のフェイスブックページにおいて紹介されました。

●北海道での支援活動 10月1日、札幌YWCAによる北海道胆振地方地震被災者支援活動に、札幌教会の日笠山牧師が加わり、むかわ町での働きに従事してきました。むかわ町と厚真町での震災被害状況の視察、そしてむかわ

礼拝堂の片隅にあるハート型の銘板には、献堂を記念する銘文が刻まれています。日付は、大正7年11月9日。この11月、久留米教会の礼拝堂は、いよいよ築100年を迎えます。

設計は、W・M・ウォーリス。大正から昭和にかけて活躍した西洋建築家であり、近江兄弟社の創立者の一人としても良く知られています。久留米教会の礼

拝堂は久留米の歴史の生き証人でもあります。戦争末期、1945年8月11日、久留米は空襲を受けます。油脂焼夷弾による被害を与えます。火災は教会の間近まで迫りますが、信徒達はこれを食い止めるようと消火活動を行います。結果、火の手は隣の建物まで及びましたが、礼拝堂は延焼を免れます。近年、同様に戦火を免

れた建物が相次いで取り壊されており、戦前から残る建物は僅かとなりました。そうした意味でも久留米教会の礼拝堂は貴重な建物となっています。

しかし、教会にとって何より意義深いことは、10年間で礼拝が守られてきたということです。毎週日曜日の主日礼拝、また、併設する日善幼稚園の幼稚園礼拝、その他折々の機会に多くの人がここに集い、聖書の御言葉を聞き、

に先立ち、國吉さんには当初支援の広島教会員Tさん宅に寄って頂き、Tさん宅の現状を見て頂きました。「あなたが生きていて良かった！」國吉さんがTさんに繰り返し語られた言葉に、目頭が熱くなりました。広島教会の伊藤牧師を介して、Tさんからは長年連れ添った家族の「猫」さんが、被災後2カ月の9月8日に、自然な形で召天したという知らせを頂いていました。被災の瞬間と、その後を共に過ごした家族の召天の喪失はどれほどであるか。み言葉のみが語る瞬間でした。水原牧師が創世記1・25から説教

を思い起こさせます。しかし背後には手付かずの瓦礫が広がっています。彼岸花が咲いています。季節は移りますが、被災の現実はいわゆる「被災者間の格差が目立つ時期です。「格差の是正」を、当事者である被災された方々が自身が関係機関に再申告することを期待し、お話を伺いすることが多い9月でした。

コスモスと瓦礫



國吉会長（左）と水原牧師



祈りのたより



ルーテルアワー  
biblestudy.jp

「ルーテルアワー」のサイト  
【てあなの部屋】より

伊藤早奈

### 不完全なあなただから

〈祈り〉

一人一人の存在を愛し、一人一人を必要としてくださる神様、今日一日を、そして与えられている一瞬一瞬を、神様あなたに感謝できる喜びをありがとうございます。

当たり前前にできることや、当たり前前にあるものは何もありません。一つ一つが神様に与えられています。失つて初めて気づくものや、失つてすぐは自分に何が起ったのかさえ、受け入れられないときもありません。このような無力な私たち人間ですが、どうかよろしくお願ひします。この祈りを、主イエス・キリストの名前によってお祈り致します。アーメン。

(詩編15・1-2a)

詩編15編には、完璧な行いをする人こそ、神様に選ばれた者として、聖なる宮に入ることがふさわしいと詩われています。

「わかっではいるけどその通りできないわ」というのが人間です。

今も小さい子どもたちが楽しむゲームに『王様ゲーム』というのがあります。ゲームの中心になった人が「王様の命令です」と言つて、次々とゲームに参加している他の子どもたちに動作を指示します。指示され

た子どもたちが、王様の命令通り行動することを楽しむゲームです。私が急にこのゲームのことを思い出したのには、ある宗教の方がこのようなことを言われていると聞いたからです。

「人に親切にするのはそれがイエス様のご命令だからです」と。

私たち一人一人には意思もあり、感情もあります。私たちはイエス様の思い通りに動く操り人形ではないのです。何よりも神様は、私たち人間に選ぶ自由をくださいました。「きつとこつちを選ぶ方が神様は喜ばれ

るだろうな。」と、分かっている時と選べない時があります。

なぜなら、私たちは不完全な存在だからです。だからこそ、私たちにはイエス様のゆるしが必要なのです。私たちのために祈られるイエス様が必要なのです。

今、詩人の言う完璧な行動を私たちが求めることは必要です。でも、できない自分を責める必要はありません。イエス様があなたに代わって成し遂げてくださいます。あなたはそのままでもいいのです。



### 「北海道寺子屋宿泊」について

原子力行政を問い直す  
宗教者の会 内藤新吾

原子力行政を問い直す宗教者の会では、原発震災の放射線影響が心配される地域の子どもたちを対象に2011年より毎夏お寺や教会を借りて北海道寺子屋宿泊という保養事業を続けています。今年参加者は子ども102

人、保護者44人の計146人でした。期間は9日、半月、1ヶ月と選べ、家族や団体など何期かに分けています。期ごとにガイダンスを持っていますが、参加の保護者の方々は普段タブーになつている放射能のことや不安を参加者同士やスタッフと話しをされます。

原発事故から7年過ぎても、全寮問題は解決していません。国が年20mSv(ミリシーベルト)以下の地域へ帰還させる政策はともて安心できないものです。チェルノブイリでは年5mSv以上で強制避

難とされました。また今年お年5mSv未満でも1mSv以上であれば移住の保障が行政より与えられています。それでも大半の子どもたちが何らかの健康影響を負っているのです。

日本ではしかし、原発事故は無かったかのようにしようとしています。9月5日時点で、福島県では甲状腺がんの確定した子が164人、疑いのある子が38人となっています(38万人対象)。他にも調査枠で把握していない甲状腺がんの子が11人います。通常100万人に1人か2人といわれた病気ですが、

どうみても異常な人数です。しかも二巡目の検査で大丈夫だったのに三巡目でがん診断された子が52人もいたことは(ブラス疑いが19人、事故の影響が否定できないと思うのですが、国はそれを認めません)。

また、調査の度に人数が増えるからでしょうか、検査も縮小しようとしてい

ます。事故による影響は福島県に留まらず、特に県外に発見が遅れ、肺転移までしている重篤な子が増えています。

甲状腺がん以外の疾患も心配です。ドイツの教会や市民グループはずつと



これらの問題を覚えてくれています。日本の教会も支援と共にこうした問題にも意識を持っていただければさらに感謝です。



### レポート「ルターナイト Vol.9」を味わう

宗教改革の始まりから500年の機会をとらえて、待っているのではなく「でかけていく教会」となり、人々が神の恵みである音楽と食べ物と交わりを楽しむ場を提供し、加えて災害被災者などの支援に連なる機会とする。それが9回を数えるルターナイトである。今回は10月12日に東京恵比寿のJELC(日本福音ルーテル社団)ミッションセンターのホールにて行われた。

第1部は、リラ・プレカリアを主宰するキャロル・サック宣教師による演奏。JELCのプログラムの一つであるリラ・プレカリアは、病の苦しみを担う人、また地上の生涯の結びを過ぎす人の心に寄り添う祈りの聖歌。音楽死生学に基づく1対1の祈りの関係の中で終末期を過ごす人のベッドサイドで奏でられる祈りが、その人ばかりか、家族や医療者をも包みこみ、慰めをもたらすものとされるのは、筆者にもある経験。今回も、聖歌から

発せられるぬくもりが集まった聴衆それぞれに与えられている心の琴線にそのまま共鳴し、一人ひとりが慰められた者として新たにされ歩み始めることを味わった。

数度に渡って協力を得ているのは、一般の飲食店。東京都内に店を構えるドイツビールの専門店が今回も出店。食品に関する現在でも有効な最古の法律であるビール純粋令は、宗教改革の始まりに先立つこと1年、1516年に制定された。これに基づいてビールを共に味わうこともルターナイトの醍醐味である。



会場を提供したJELC Aによる社会貢献活動について、また教育プログラムについても紹介がなされたが、それを担った職員たちもまた教会に育てられた若者たちであったことは印象的であった。入場料にも含まれたチャリティ募金と収益金は、西日本豪雨と北海道胆振東部地震の被災地支援などに贈られた。でかけていく教会の歩みは「500年」から先へと続いていく。



ルターナイトのシンボルキャラクター